

Adventures of Huckleberry Finn 再考

— Jim の “white inside” —

山 本 祐 子

序

*Adventures of Huckleberry Finn*¹には色を表す言葉、すなわち色彩語が “white”, “black”, “gray”, “blue”, “red”, “pale”, “green”, “yellow/yaller”, “brown” と9種類使われているが、これらの色彩語が使われる回数は合計で113回になる。そのうち “white” が31回, “black” が33回を占める。したがって、この作品に使われている色彩語の半分以上が “white” と “black” で占められていることになる。しかも Twain は, Pap や Col. Grangerford といった白人達の姿や独特な自然情景などを “white” と “black” のコントラストを基調とした水墨画のような色使いで印象的に描き出すことで、白人達が “white” と “black” のごとき相反する二面性を抱え込んでいることを象徴的に表していったのである。そのことについては拙論「*Adventures of Huckleberry Finn* の色彩語—“white” と “black” の多用とその意味—」において論じているので、ここでは省略する。² だがそこで問題となるのは、これほど多用され、かつ強烈に読者に訴えてきた “white” と “black” という色のコントラストが、第32章以降の Phelps エピソードに入ってから完全に姿を消してしまうことである。厳密に言うと、*Huck Finn* の約1/4を構成する Phelps エピソードにおいて “black” という言葉は一切使われていない。また “white folks” (276, 309) や “white woman” (277) のように明らかに白人を意味する3例を除くと、

“white” という言葉はその他に 3 例しか見あたらないのだ。³ その上 Phelps エピソードで使われているあらゆる色彩語を含めても、特筆すべき色彩語と言えば下記に挙げる一例だけと言っても過言ではない。⁴

それは第40章において Jim が、Tom と Huck の助けを得て無事逃げ出したものの、傷ついた Tom を救うため自らの自由すら犠牲にしようと立ち上がる場面だ。

“Well, den, dis is de way it look to me, Huck. Ef it wuz *him* dat ‘uz bein’ sot free, en one er de boys wuz to git shot, would he say, ‘Go on en save me, nemmine ‘bout a doctor f’r to save dis one?’ Is dat like mars Tom Sawyer? Would he say dat? You *bet* he wouldn’t! *Well*, den—is *Jim* gwyne to say it? No, sah—I doan’ budge a step out’n dis place, ‘dout a *doctor*; not ef it’s forty year!”

I knowed he was white inside, and I reckoned he’d say what he did say—so it was all right, now, and I told Tom I was agoing for a doctor.(340-41) (強調は筆者)

身勝手に奴隷のことなど親身に考えない白人少年の Tom に比べて、自己犠牲をもいとわない人道的な愛に溢れる黒人奴隷 Jim の姿が読者の前に鮮烈に訴えかけてくるきわめて感動的な場面だ。そしてまさにこのとき Huck は、Jim こそが “white inside” だという一見簡潔ではあるが、ひどく深遠な言葉をつぶやく。つまり Phelps エピソードに至るまで、Twain は “white” と “black” という色のコントラストを通して白人の二律背反する表と裏の顔を象徴的に描き出そうとしていた。そして Phelps Farm に入ってから、かわりに黒人奴隷の Jim こそが “white inside” だという Huck の特異かつ意味深い言葉だけを残して、物語は結末へと向かうのである。そこにはもちろん、“white” と “black” と

う肌の色によって区別されてきた黒人と白人という人種問題に対する Twain の確固たる意図が隠されているに違いない。そこで本論では Shelley Fishkin が *Was Huck Black* において取り上げている黒人特有のレトリック “signifying”⁵ の観点から、Phelps エピソードを考察し、最終的には “white inside” という言葉に込められた Twain の意図を探るつもりである。

1

Fishkin は “signifying” を論じる上で、Twain が少年時代の思い出をつづった随筆 “Corn-Pone Opinions” に登場する Jerry を取り上げている。というのもこの Jerry は仕事の合間に積み上げられた木材の上に立ち、説教壇に立つ白人牧師の仕草を見事に真似て説教を一席ぶってみせる。これは一黒人奴隷が白人牧師の実に退屈な演説を面白おかしく演じて見せる、という滑稽な子供の戯れのように写る。しかし Jerry のたわいもない口まねには、実は白人牧師をからかい、ひいては白人牧師がキリストの名を借りて奴隷制を正当化しようとする歪んだ説教そのものを痛切に皮肉するという意図が込められていたと言うのだ。⁶ そして Fishkin によると、これこそ弱い立場にある黒人達が白人達に悟られずに皮肉を伝えるため、古来より巧みに操ってきたレトリック “signifying” であるとして、次のように説明している。

In the New World, these African rhetorical traditions of indirection stood the slaves in good stead. Here caution and circumspection were necessary for survival: in an environment where slaveholders exercised total, absolute power, the ironic doubleness of “signifying” speech and song became the source of the impunity with which slaves could voice the unspeakable. On the surface, nothing subversive may have been said. Below the

surface, however, the speaker sketched a highly subversive critique of the strong by the weak. For “signifying” speech can generate two meanings: one appears neutral and unobjectionable; the other may embody potentially dangerous information and ideas.

This was precisely what W. E. B. DuBois tried to explain to the readers of the *Mark Twain Quarterly* in the Fall-Winter issue of 1943 in an essay titled “The Humor of Negroes.” Central to Negro humor, DuBois noted, was “the dry mockery of the pretensions of white folk. . . . Many is the time that a truculent white man has been wholly disarmed before the apparently innocent and really sophisticated joke of the Negro, whom he meant to berate.”⁷

すなわち “signifying” とは、語り手である黒人達が表面上は従順を装い、とりとめもないことを言っているかのようなのだが、その奥底には自分たちを支配し抑圧する白人達への反抗的な批判が込められているというのである。W. E. B. DuBois によると、黒人達の一見たわいもない冗談の真意は “the dry mockery of the pretensions of white folk” 「白人達の思い上がりを巧妙にからかうこと」であったのである。そしてまさに “Corn-Pone Opinions” の Jerry が白人牧師を滑稽に猿まねするという戯れにおいても、「白人達の思い上がりを巧妙にからかい」、白人達を痛切に批判するという密かな意図が込められていたというのである。

“Corn-Pone Opinions” の Jerry と全く同じように、Phelps Farm における Jim もまた白人 “authorities” の姿を猿まねするのだが、その滑稽な姿を通して「白人達の思い上がりを巧妙にからかい」痛切に批判していることになるのである。というのも Tom は、トレンク男爵やカサノバ、ベンベヌート・チェリーニ、フランス王アンリ 4 世といった華麗なる

脱獄を成し遂げた英雄達を“authorities”と呼んで敬い、彼らの冒険物語がつづられた本にある通りに Jim を救い出そうと異様なまでに執着する。その中で Jim は“prisoner”の役回りを押しつけられ、小屋にいたずらに縛り付けられ、字も書けないのに血でシャツに日記を書いたり、涙で花を咲かせようとしたり、ヘビ・クモ・ネズミまでペットとして飼うなど、Tom の崇拜する英雄達が牢獄で堪え忍ぶ姿をうわべだけ猿まねさせられる。もちろん Jim はこれらの脱獄計画は無意味だと懸命に反対する。しかし、所詮 Jim は Tom に敵うはずもなく、Tom から Jim は物の道理をわきまえない愚か者だと嘲られ、「名誉」を得る絶好の機会をふいにしていると説き伏せられてしまうのである。こうして Jim は白人少年 Tom に滑稽なまでに従順で、意味も分からないまま Tom の崇拜する英雄達を猿まねしていく。こうした Jim の姿を目にして、当時の白人読者の多くは何の疑問も抱かず屈託なく笑い飛ばしたに違いない。⁸しかし Twain はこうした黒人 Jim の愚かで滑稽な猿まねを通して、かえって白人 Tom が憧れる英雄達や、Tom が尊ぶ「名誉」なるものをからかい、それらの無意味さを訴えていくのである。

そればかりか Twain は、Jim を犠牲にした滑稽な猿まね脱獄を通して、Phelps 家の大人達あるいは白人社会全体まで皮肉ろうとする。というのも第38章では、Tom が Jim のために“*Here a captive heart busted.*”(322) といった感傷的で安っぽい碑文や、誤りだらけの“coat of arm”を考案する場面がある。粗末な衣服しかまとわぬ逃亡奴隷の Jim が“coat of arm”を持つという皮肉に加え、この紋章の正面上部には“a runaway nigger, *sable* with his bundle over his shoulder on a bar sinister”(322) と黒い逃亡奴隷の姿まであしらわれていた。黒人奴隷の Jim が何の役にも立たない無意味で、しかも皮肉に満ちたこの紋章と碑文を砥石に刻み込み、王位を追われて牢獄に囚われた高貴な“state prisoner”を演じるのである。⁹それはまるで道化芝居のようであるが、この Jim という道化の姿を通して、Tom が憧れる王侯貴族や古い

文化への幻想をからかっているのだ。ひいては出生や血筋が尊ばれる身分制度や、白人達がそれらにこだわる無意味さを訴えている。

というのもこのエピソードに先立ち、Phelps 家では自分たちの高貴さを誇示するために、無意味ながらくたを家の屋根裏に大切にしまい込んでいたことが読者に知らされていたのである。

but uncle Silas he had a noble brass warming pan which he thought considerable of, because it belonged to one of his ancestors with a long wooden handle that come over from England with William the Conqueror in the Mayflower or one of them early ships and was hid away up garret with a lot of other old pots and things that was valuable, not on account of being any account, because they warn't, but on account of them being relicts, you know . . . (319)

Victor A. Doyno は原稿の詳細な考察から、“In Tom Sawyer’s ethic or language system, “noble” carries favorable connotations, and accordingly Twain frequently revises it into highly inappropriate contexts.” とし、Twain が皮肉をこめて “noble” という言葉を選んでいたことを明らかとしている。¹⁰ したがって Phelps 家が “noble brass warming pan” といった何の役にも立たないがらくたを重宝がり、自分たちがイギリスから渡ってきた Pilgrim Fathers の子孫であり、“noble” であると自負しおごり高ぶる姿を皮肉っていたことも容易に想像できる。さらに言えば、Twain は白人達が黒人奴隷達に対して、肌が白いというだけで生まれながら尊ばれるべき “noble” な存在と思い上がり、“nobility” のごとく振る舞っていたことを皮肉っていたとも考えられる。しかし黒人奴隷の Jim がでたらめな家紋と碑文で “nobility” を真似る滑稽さと同様に、白人達が “noble brass warming pan” という無意味ながら

くたをひけらかして“nobility”を気取る様は滑稽にしか写らないのである。こうして Jim は一見滑稽な猿まねを通して、白人達の尊ぶ「名誉」や“nobility”，ひいては奴隷制を基盤とする身分制度がいかに無意味であるかをさらけ出し、それら無意味なものにしがみついた白人達の愚かさをあざ笑うのだ。

先に挙げた“Corn-Pone Opinions”の Jerry が白人牧師を真似る姿は、一見白人牧師や、大きくキリスト教社会全体の擁護する黒人奴隷制度に従順であるかのように見える。しかし彼の物まねには、白人牧師や奴隷制度への批判が巧みに盛り込まれているのだ。これと同様に Jim は表面上は白人に従順であり、Tom の言いなりとなって白人“authorities”を滑稽に真似てみるが、そこには白人達の愚かさを読者に知らしめ、皮肉る意図が込められていたのである。そして Jim の反応を通して、白人達が無知で愚かだとさげすんできた黒人奴隷の方が本当は優れているのではないかという問い掛けを読者に投げかけている。

2

Fishkinは、Jerryが“sygnifying”を通して従順を装いながら巧みに白人達を皮肉る姿に、弱者なりの知恵を生かして白人達を出し抜く“trickster”としての力を見だし、次のように述べている。

In traditional trickster tales from both Africa and the United States, a weak figure outwits a stronger and more powerful one with cleverness and guile. Popular among those at the bottom of the social structure in rigidly hierarchical African societies, “African trickster tales often ‘illustrate the traditional right of the individual to contest irrational authority.’” The implications of the smaller, weaker, more cunning figure outwitting the larger, stronger, more dull-witted one remained the same when

these tales took root in the United States. It was a source of hope for those at the bottom.¹¹

アフリカとアメリカにおける伝統的な物語 “trickster tales” では、弱者が巧みな知恵を生かして強者を出し抜く。これら “trickster tales” に込められたメッセージを Lawrence W. Levine の言葉でより具体的に表現するとすれば、たとえ社会の弱者であっても “trickster” としてうまく立ち回ることによって、“overturned the neat hierarchy of the world in which he was forced to live” という成果をあげることができるのである。そしてそうした可能性を示すことにより、アメリカで奴隷として迫害されてきた黒人達自身を力づける役割を担っていたと言う。¹² これと同様に、Jim の姿は表面上は逃亡奴隷として幽閉され白人達に虐げられている弱者として描かれてはいるが、実はそれこそ巧みなレトリックであり、弱者である Jim の姿を通して支配者である Tom や白人達の愚かさや思い上がり、あるいは残忍さを浮き彫りにし、皮肉っているのだ。その意味では弱者の Jim は “trickster” であり、強者の白人達をまんまと出し抜いていることになるのだ。そればかりではなく、最後には人間味という面で弱者の Jim が強者の Tom を組み伏せ、弱者と強者という立場がすっかり逆転してしまうことになる。

というのも Tom はいざ Jim を盗み出す際に立っても、“authorities” や冒険小説にこだわり、フランス王ルイ16世のチュイルリー宮殿脱出を忠実に再現させようとして、匿名の手紙を書いたり、Jim に女装までさせる。こうした愚かな行為が災いして、Tom は逃走の際に村人達の銃弾を受け重傷を負ってしまう。それでも彼は傷付きながら、次のように言うのだ。

“Gimme the rags, I can do it myself. Don’t stop, now; don’t fool around here, and the evasion booming along so handsome:

man the sweeps, and set her loose! Boys, we done it elegant! —‘deed we did. I wish *we’d* a had the handling of Louis XVI, there wouldn’t a been no ‘Son of Saint Louis, ascend to heaven!’ wrote down in *his* biography: no, sir, we’d a whooped him over the *border*—that’s what we’d ‘a’ done with *him*—and done it just as slick as nothing at all, too. Man the sweeps—man the sweeps!” (340)

Tom はまるで大きな船の船長のごとく Huck と Jim に号令を送り、英雄のごとく自らの冒険を吹聴するのである。Tom は傷ついてもなお「名誉」やルイ16世といった“nobility”の幻想にとりつかれ、もはや現実との区別さえ付かなくなっているかのように見える。ここでの Tom はくだらぬ幻想のために生命まで危険にさらす愚かきわまりない姿が浮き彫りとなっているのが分かる。しかも愚かであるばかりか、彼は銃弾で傷いた寄り道ない少年であり、実に弱い立場に置かれていたのである。Jim のために Tom が詠じた碑文の一節“*Here a captive heart busted.*”は、まさに幻想に“heart”を囚われ生死の境に立たされている Tom にこそふさわしい言葉となったのである。

そしてちょうどこの時に、本論の冒頭ですでに述べたように、Jim が自らの自由を犠牲にしてまでも Tom を救おうと立ち上がる重大な場面を迎えるのである。本論の最初の引用文をもう一度見てもらいたい。ここでも Jim は表面上は Tom を白人として敬う姿勢を崩さず、Tom が同じ立場にいればきつと語るであろう台詞や Tom が尊ぶ“style”を真似て、誇らしげに自分の意見を述べる。だが何度も述べてきたように、Jim はここでも表面上は従順を装って、Tom という白人の姿をまねることでかえって、白人 Tom が傷つきながらもくだらぬ幻想に囚われている愚かさや、これまでの Jim に対する無慈悲な仕打ちをかえって皮肉ことになるのだ。¹³ その一方で、Jim は自分の自由を危険にさらしてでも Tom

を救うという決断を下し、彼のうちに秘められた優れた資質と強さを見せつけるのである。こうして愚かな弱者 Jim と聡明な強者 Tom というこれまでの立場が、ここでは完全に逆転してしまっているのが分かるはずだ。

そしてこの時の Jim の崇高な姿を目の前にして、Huck は “I knowed he was white inside” という問題の発言を読者に投げかけるのだ。その言葉にはもちろん、白人への痛切な皮肉が意図されている。そのことを、的確に言い表しているのが David Smith の次の言葉である。

Huck declares that Jim is “white inside” (chap. 40). He apparently intends this as a compliment, but Tom is fortunate that Jim does not behave like most whites in the novel. . . . Twain also contrasts Jim’s self-sacrificing compassion with the cruel and mean-spirited behavior of his captors, emphasizing that white skin does not justify claims of superior virtue.¹⁴

つまり Huck が Jim こそは “white inside” だと述べたのは、Jim が外面においては “black” であり卑しまれる黒人奴隷としか写らなくとも、その内面において “white” であり、白人と変わらぬ人間的な精神を宿していたことを見抜いていたからなのである。反対に Tom は外面において “white” であり白人として尊ばれてきたが、その内面まで優れているとは限らないのだ。ここでは “black” や “white” といった外見を彩る肌の色だけが重視され、全てが決定される短慮・短絡さがほのめかされている。

以上のように Phelps エピソードでは、「白人」と「黒人」を象徴する “white” と “black” との境目が曖昧となり、むしろ倒錯してきている。たとえば第33章では King と Duke が “tar and feathers”(290) というリンチにあい、白いはずの肌がタールで黒々と塗りたくられ、黒人さな

がらの姿をさらす。また Phelps Farm には “yaller wench”(315) と呼ばれる、白人と黒人の血が混ざった奴隷娘までが登場する。しかも白人少年の Huck がこの “yaller wench” のドレスを着て変装までするという意味ありげな場面すらある。そして何よりも重要なのは、黒人奴隷 Jim の姿を通して “white” と呼ばれて尊ばれる白人達の愚かさを繰り返しさらけ出し、最終的には黒人 Jim と白人 Tom の上下関係を逆転させて、Jim こそは内面において “white” だとまで言い放つのだ。こうして Twain は “white” と “black” という肌の色にまつわる偏見的な定説をくつがえし、それらへ疑惑の目を向けさせようと試みていたのである。この “white inside” という Huck の言葉には、Jim は外面において “black” であり卑しい黒人であるが、その内面は “white” であり白人以上人間であることを強く宣言するものである。

3

このように考えると、Jim は外面が “black” で内面が “white” という二面性を持ち合わせていることになる。そのために Jim はとらえどころのない難解な存在であったとも言える。たとえば Jim が第41章でどうとう村人達に捕えられたとき、Tom に付き添っていた医者には、Jim が自らの自由すら犠牲にしてまで Tom を救おうとしたとして、次のように誉める。

I never see a nigger that was a better nuss or faithfuler, and yet he was resking his freedom to do it, and was all tired out, too, and I see plain enough he'd been worked main hard, lately. I liked the nigger for that! I tell you, gentlemen, a nigger like that is worth a thousand dollars—and kind treatment, too. . . . And the boy being in a kind of a flighty sleep, too, we muffled the oars and hitched the raft on, and towed her over

very nice and quiet, and the nigger never made the least row nor said a word from the start. He ain't no bad nigger, gentlemen; that's what I think about him.”(353-54)

ここでの Jim は白人達に “faithfuler” であったとして高く評価され、千ドルにも値する “nigger” だと賞賛されている。また最終章において Jim がすでに自由であることが分かって解放され、“aunt Polly and uncle Silas and aunt Sally found out how good he helped the doctor nurse Tom”(360) する。それでも Jim は、あくまで “nigger” として手厚くもてなされるのである。つまり Jim が Tom を救ったというのは、Huck の目には “white inside” であり白人にも劣らぬ高潔な態度と写っていたのだが、村人達の目には白人達に盲目的に従属する “nigger” に相応しい行為として受け止められているのだ。Huck と村人達では、Jim の捉え方が全く異なっている。いや Huck 一人の中でも一貫性がなく、Jim を “nigger” としてばかにするかと思えば、“white” の部分を認めて尊重することもある。

そればかりか Jim 本人の態度も揺れ動いている。というのも Jim は、奴隷制度に逆らい、逃亡までして白人達に反抗しておきながら、自由の身となってからはそのまま白人社会に安住してしまう。このことは Jim が黒人でありながらも、いつの間にか白人社会の価値観に染まり、それに縛られていることを如実に物語っている。だからこそ Huck は、物語の最後に “But I reckon I got to light out for the Territory ahead of the rest, because aunt Sally she's going to adopt me and sivilize me and I can't stand it. I been there before.”(362) と言って、白人の Tom ばかりか、“white inside” の Jim にすら未練を残さず、白人社会 St. Petersburg から逃げ出す決断を変えないのである。

以上のように見ていくと、Huck が Jim に向けた “white inside” という言葉の隠された意図とは、ひたすら黒人奴隷として生きざるえなかつ

た Jim であっても、実は、“black”と“white”のごとき二面性を抱え込んでいて、白人“authorities”の一面的で偏った見方では決して真実の Jim の姿あるいは黒人問題が見えてこない現実を突き付けることであつたのだ。

結論

本論の冒頭で述べたように、*Huck Finn* の第31章までは“white”と“black”という色のコントラストを通して描き出すことで、白人達が二律背反する表と裏の顔を持ち合わせていることを象徴的に表していった。そして Phelps エピソードにおいても、Twain は外見を彩るだけの肌の色への徹底した不信をあらわにして、人間には外面と内面という相反する二面性を持ち合わせていることをほのめかすのである。そのために肌が“black”と不当に蔑まれてきた Jim の姿を通して、肌が“white”であるとして尊ばれてきた白人達の愚かさや醜さをさらけだしていくのだ。そして最終的に“black”の Jim と“white”の Tom の立場を全く逆転させ、Jimこそは“white inside”とまで呼ばせるのである。そこには、黒人奴隷として蔑まれてきた Jim が白人に劣らぬ資質を備えていることを訴えている。だが Twain の深遠な意図はそれだけにとどまらない。つまり白人のみならず黒人 Jim もまた、“black”と“white”という二面性を抱え込んでいることを示すことで、Jimら黒人達ひいてはアメリカ社会全体を、白人の手前勝手な価値観だけによらない複合的な視野で捉えていかねばならないことを苦言しているのだ。

Notes

本論文は、日本アメリカ文学会関西支部10月例会（2000年10月7日）において口頭発表したものに加筆修正したものである。

- 1 Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn, The Works of Mark Twain*, Vol.8, ed. Walter Blair, and Victor Fischer (Berkeley: U of

- California P, 1988). 以後この書を *Huck Finn* と略記する。この書からの引用は全てこの版によるものであり、引用文の末尾には(頁数)を付記する。
- 2 拙論「*Adventures of Huckleberry Finn* の色彩語－“white” と “black” の多用とその意味－」, 『神戸女子大学文学部紀要』33 (2000): 49-59. ここまでに記した “white” と “black” の登場回数や使われ方などは、すべてこの論文において考察した資料によるものである。
 - 3 その3例とは, “white shirt” (303), “turns white as a sheet”(337), “I knowed he (Jim) was white inside”(341) である。
 - 4 “white” と “black” 以外で使われている色彩語を全て挙げると, “turned bule all over”(279), “yaller dog”(290) “she was hot, and red, and cross”(313), “turned kinder blue around the gills”(314), “red flann’l one(shirt)”(314), “yaller wench”(315), “yaller girl”(332), “brown study”(348) “gray hair”(350), “he was. . . pale”(354) だけである。これらから分かるように, Phelps エピソードではほとんどの色彩語が慣用表現や複合語として用いられていて, 印象的かつ独特な使われ方をしてる例は皆無に等しい。
 - 5 Shelley Fisher Fishkin, *Was Huck Black?: Mark Twain and African-American Voices* (Oxford: Oxford UP, 1993). “signifying” は同書の第3章を中心に取り上げられている。
 - 6 Fishkin によると, “Corn-Pone Opinions” は Twain の死後発見されたものであるため, 正確な制作年は不明であるが, Paul Baender によるもっとも最新の研究によると1901年と推定されている。詳しくは同書173ページを参照。“Corn-Pone Opinions” の本文については, Mark Twain, *Europe and Elsewhere* (New York: Harper and Brothers, 1923) 299-406. に掲載。
 - 7 Fishkin 61.
 - 8 *Huck Finn* に登場する Jim の姿は当時の典型的な黒人奴隷像に倣う部分が多く, 迷信好きで無知, かつ愚かで滑稽な姿が描き出されている。この歪んだ黒人像は, minstrel show の影響を受けているという指摘が多くの批評家によってなされてきた。なかでも Eric Lott は Twain が *Huck Finn* 執筆の際も “blackface minstrelly” といった “popular materials rather than artificially refined or imposed ideas” をあえて用いているとした上で, “Twain took up the American dilemma not by avoiding

popular racial representations but by inhabiting them so forcefully that he produced an immanent criticism of them.”と指摘している。言い換えれば、Phelpsエピソードに描き出されている Jim の滑稽な姿もまた当時の “popular racial representation” に倣っていて、表面上は白人達の優位意識を満足させるものであったと言えるだろう。さらに詳しくは、Eric Lott, “Mr. Clemens and Jim Crow: Twain, Race, and Blackface,” *The Cambridge Companion to Mark Twain*, ed. Forrest G. Robinson (New York: Cambridge UP, 1995) 141.

- 9 紋章に使われた言葉 “sable” とは紋章用語で「黒色の」という意味であるが、*Huck Finn* では Jim などの黒人奴隷が “black” や “dark”, “brown” などの色で形容されることは一度もない。つまりここでは、*Huck Finn* において初めて Jim の肌の色が「黒い」ことを間接的にはあるが、明確に示唆している。そしてこの「黒い」肌の Jim が、“nobility” や白人達の姿を真似ることになるのであるから、Jim の紋章にはいかに痛切な皮肉が込められているか窺い知れる。
- 10 Victor A. Doyno, *Writing “Huck Finn”: Mark Twain’s Creative Process* (Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1991) 124. Doyno はこの指摘の例証として、“noble brass warming pan” の箇所や、“There was a noble good lot of them(rats), down cellar”(316) を挙げたうえで、“Then we went to the nigger cabins, and while I got Nat’s notice off, Tom shoved a piece of candlestick into the middle of a corn-pone that was in Jim’s pan, and we went along with Nat to see how it would work, and it just worked noble”(310) における “noble” は当初 “first-rate” と書かれていたことも記している。
- 11 Fishkin 65.
- 12 Lawrence W. Levine, *Black Culture and Black Consciousness: Afro-American Folk Thought From Slavery to Freedom* (New York: Oxford UP, 1977) 114.
- 13 このとき Jim は aunt Sally の “calico dress” を着ていたことになるので、彼の外見的な装いは彼の気高い行動とはひどく不釣り合いに写るはずだ。実際に *Huck Finn* の初版に掲載された Edward Windsor Kemble の挿し絵にも、ドレスを着た Jim が雄々しく立ち上がって意見を述べるという不自然な姿があえて描きだされている (*Huck Finn* の341ページを参照)。これ

まで Jim が “authorities” や “nobility” を真似る姿を、Twain は皮肉を込めてあえて滑稽に描き出していると指摘してきた。したがってここで Jim が Tom を真似る場面においても、女装という不釣り合いで滑稽な姿を読者にさらしていたのは偶然とは考えられない。

- 14 David L. Smith, “Huck, Jim, and American Racial Discourse,” *Satire or Evasion? Black Perspectives in “Huckleberry Finn,”* ed. James S. Leonard, Thomas A. Tenney, and Thadious M. Davis (Durham: Duke UP, 1992) 115.